

## 平成 26 年度卒業式告示

皆様、ご卒業おめでとうございます。本日ここにご出席いただいておりますのは、今日に至るまで学ぶためにたゆまぬ努力を継続し、宮崎公立大学での学業を無事修了された 202 名の卒業生の皆さん、そして今日に至るまで支えてくださった保護者およびご家族ならびに関係者の皆様です。すべての皆様に深い敬意と感謝を表します。誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。また、御来賓の皆様には、大変ご多忙のなかご参列を賜りまして、感謝申し上げます。

日本語で卒業とは学校の全課程を学び終えることを意味しますが、英語では卒業式のことを COMMENCEMENT と言います。卒業ではなく始まりという意味です。日本の卒業式は、桜の花の開花の頃、桜の花びらが青空に映えるときです。

アメリカのロースクールを卒業した経験がありますが、アメリカの卒業式はだいたい 5 月末から 6 月初めの新緑の美しいところに行われます。アメリカの COMMENCEMENT は、とても新鮮な経験で、忘れがたいものでした。本日の卒業式は、皆さんの新しい人生の始まりの日として、生涯忘れることができない日となると思います。心から祝福します。

皆さんが学ばれた宮崎公立大学は、1993年に教養レベルの語学や国際的知識にとどまらず、諸外国の文化・歴史・経済等におよぶ広範な知識を持ち、職業人としてかつ生活人として様々な国際交流の場面で、主体的に行動し、国際的に貢献できる国際教養人の育成が急務であるとして、設立されました。今日のグローバリゼーションを先取りした格調高い若々しい熱意を感じます。

開学から二十二年目を迎えて、卒業生は 3, 535 人になり、さまざまな分野で活躍しており、高い評価を受けております。本日卒業される皆様も新たに本学の卒業生の一員となることを誇りに思っていたきたいと思えます。

いよいよ学び舎である大学を出て、これから皆さんは卒業後の生活に、大きな夢と希望をもって臨まれると思います。ある人は、教師に、ある人は企業に、あるいは公務員として職業生活に進まれ、また、大学院に進学される方もあると思います。中には、卒業後に進路をきめようと思っている方もあると思います。これから社会人として世の中に本格的に出て行く皆さんに、「人生の本舞台は、常に将来に在り」と言う尾崎行雄の言葉を贈りたいと思います。尾崎行雄は、1858年、明治生まれの政治家です。1890年の第1回衆議院選挙で当選してから、二十五回連続で国会議員に当選し続けました。この記録を破る政治家は、未だ出ていません。尾崎行雄は、あらゆる権力の弾圧に屈することなく、政治

の腐敗を許しませんでした。徹底的な平和主義者で、護憲主義を唱えたことで知られています。尾崎行雄は一九五四年に95歳で亡くなるまで、立憲主義のために戦いました。立憲主義というのは、憲法に基づいて政治を行うことを意味し、個人の権利・自由を保障する「法の支配」を実行しようとする考え方です。しかし、尾崎行雄は、たとえ憲法があっても、使い方を間違えれば、国民は「奴隷」になると警告しています。日本における憲法改正が現実の問題となってきたいまこそ改めて深く考えなければならない言葉です。また、尾崎行雄は日米友好にも大きな功績を残しています。東京市長（東京都になったのは1943年です）をしていた1912年に日米友好のために桜の苗木6,040本を船でアメリカに送りました。それがポトマック河畔に根付いてワシントンDCの桜の名所となっていることはご存じの通りです。アメリカからは返礼としてハナミズキの木が送られました。生涯闘い続けた強い精神力の持ち主でしたが、思い悩み、失意のどん底に沈んだときもありました。1933年七十五歳の時、尾崎行雄は三重県を遊説中にひどい風邪と中耳炎にかかりました。1933年は、国際連盟総会が日本の満州からの撤退勧告案を可決し、日本が国際連盟を脱退した年です。このような危機のときに選挙の遊説が出来ず、平和を訴えることができない無念さと中耳炎の痛みに苦しめられた病の床で、出てきたのが「人生の本舞台は常に将来に在り」という言葉だったのです。「今までの失敗は、今後成功するための試練であり、準備である」という考え方で、「人は何歳になっても、それまでの人生は序幕にすぎない、常に、これからが本舞台なのだと考えて行動しなさい」という意味です。

私は縁あって尾崎行雄の三女の相馬雪香さんと親しくお付き合いさせていただいたこともあり、尾崎行雄のことはとても身近に感じています。相馬雪香さんは、学習院女学院の生徒の頃、東京市内をオートバイで走り回り、若い頃から新しいことにチャレンジすることが好きで、日本で最初の同時通訳の一人であり、日本で最初に難民救援の市民団体を創った人です。三十歳以上も年上でしたが、2008年に九十六歳で亡くなるまでに実にいろんなことを教えてくださいました。八十歳を過ぎても同時通訳ができるほど英語に堪能で、頭脳明晰、学び続ける努力を生涯続けられました。また、弱い人々に対する支援にも尽力されたすばらしい方で、私の人生で大きな影響を受けた方の一人です。『悔しかったら、歳を取れ』という野田一夫氏の本がありますが、長く生きてきた人から学ぶことはとても貴重で大切なことだと思っています。同じ年齢の人とばかりではなく、多様な年齢層、多様な職業、多様な考えの人々、様々な国々の人々、できるだけたくさんの分野の方と出会い、出会いの中で、自分を磨いてほしいと思います。チャレンジ精神を遺憾なく発揮していただきたいと思っています。

この度卒業される202名の皆さんを待ち受けているのは、尾崎行雄が生きた時代とは比較にならないほどの速度でグローバル化が進んでいる社会です。情報通信技術の革新の速さが、グローバル化をさらに加速しています。拡大するグローバル化

ションの中で世界は、揺れ動きつつ新たな秩序の再構築に向かっています。アメリカの国際政治学者サミュエル・P・ハンティントンが1996年に執筆した『文明の衝突』のもともとのタイトルは「The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order」、『文明の衝突と世界秩序の再創造』です。こういう時代だからこそ、理解力、読解力、コミュニケーションのツールとしての言葉の力を改めて鍛えなおす必要があります。皆さんは、学士号を取得されたのですから、これからの人生の羅針盤の中に、学び続ける努力を是非入れてほしいと思います。大学で学んだ教養と知識を絶えず、補強して、心身ともにみずみずしさを保つようにしてください。本学において、海外の異文化体験をされ、英語のみならず、東アジア言語にも挑戦された方が多いと思います。新しい時代に対応するために言語能力、コミュニケーション能力をさらに高めてほしいと思います。

私は、労働法が専門なので、働く上でのさまざまな問題について相談を受けることが多く、ときには、裁判にかかわることもあります。みなさんの多くにとって、これからは働くことが人生のかなりの部分を占めると思います。学長になって、忙しいですが、労働法を教え続けています。卒業生の多くが就職し、働き続ける人が多いので、働くために欠かせない労働法の知識は自分を守るために持っていたきたいと思うからです。全国でも労働法の専門家が学長になっている大学は少ないと思います。学生を送り出すときに学長としてまず願うのは、働き甲斐のある職場で、よき同僚、よき上司に恵まれることです。社会に出られた後も、大学はいつでも皆さんをサポートしたいと考えています。

宮崎公立大学は、本年6月にハワイ大学およびハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジと学術交流協定を結び、夏には第1回の語学研修生をハワイに派遣することになりました。国際交流と外国語学習の拠点となるグローバルセンターも本格的に稼働し始めます。これまで蓄積してきた国際交流の経験とノウハウを活かして、2015年を宮崎公立大学の新たなグローバル戦略の始まりの年としたいと思います。宮崎公立大学の改革を進めるために教職員一丸となって努力して参ります。その改革の進行を確かめるためにも凌雲祭やホームカミングデーには、是非キャンパスに戻ってきてください。

最後に、改めて皆さんのご卒業とその限りない前途を祝し、健康で希望に満ちた人生でありますように祈念いたします。

ご卒業、誠におめでとうございます。

平成二十七年三月二十四日

宮崎公立大学 学長 林 弘子